「笹川杯作文コンクール 2011」～中国語で応募～ 第３回優秀賞作品

「精神力は無限」

安徽省　許志勇

中国の汶川地震の後、ある日本人が自らもいだりんごと真心あふれる手紙をくれた。万里のかなたから転々として被災地の一人の高校生の元に届いたのである。そのニュースを見た時、私はとても感動した。手紙にあった「財産は身体ほど重要ではなく、身体は心ほど重要ではありません。冬はいつしか過ぎ去り、必ず春が訪れます」との言葉には、また感無量だった。

ある科学者が行った実験を思い出した。死刑囚を手術台に固定して“血を抜いて死なせる” 刑に処すと告げ、腕に輸血管を挿入して、輸血管のもう一端を大きな容器に向けたのである。“血抜き”開始後、科学者は死刑囚の目の前で止血用鉗子を取り出し、血管をつまんで止血し、例の容器に水道水を一滴ずつ垂らして血が滴る音に似せたのである。科学者が驚いたことには、一定の時間が経過すると、死刑囚は本当に死亡していたのである。この実験結果は、人は精神が崩壊してしまうと自身も死んでしまうということを証明している。

中国では別の似たような例も出た。ある農民が「不治の病」と呼ばれる肝臓癌にかかったと知って、治療を放棄し、一日一日を生きようと心に決め、毎日しっかりと飲み食いをし、農作業をしたり遊びに出かけたりして、悠々自適の生活を送ったのである。その結果、日々が過ぎ、月々が過ぎ、年も過ぎていった。後にこの農民が身体検査を受けてみると、意外にも肝臓癌は既に全快していたのだった。

この例もまた、精神力が作り出した奇跡に違いない。もしこの農民が肝臓癌を患ったと知って精神崩壊を起こし絶望に沈んでいたら、彼の命はとっくに病魔に呑み込まれていただろう。だが彼は死に神にも病魔にも屈しなかった。楽観的な気持ちと合理的な生活により、身体の免疫力と抵抗力が通常以上に発揮され、最終的には病魔を打ち負かしたのである。

この二つの例からも、人の精神力がいかに強大なものであるかが分かる。人は生きていれば様々な避けがたい危機や困難に遭遇するものだ。どのような精神状態で、どういう方法で困難を克服し危機を逃れるか。そこには能力の大きさが映し出されるのかもしれない。

哲人いわく、世界に「人より高い山、足より長い道はない」。ただ「心の死にまさる悲しみはない」、「天道人を殺さず」という真理があるのみだと。精神の力を信じよう。精神の力とは、潜在能力を極限まで引き出せるのだ。

災害は天が与え給うた甘露であり、私達が強く成長するためのミルクである。気落ちして救われない状態になる時は誰にでもある。その時、そばにいてくれる人こそ、最も気に掛けてくれる友人なのである。その友こそ落ち込んだ時に慰め励まし、苦悩の海から抜け出て新しい人生を迎えられるよう助けてくれるのだ。こうした友情は精神の拠りどころであり、またそれ以上に、強大な精神の力でもある。だから、友人に対しては、普通は遠くから黙って祈りと祝福を捧げていればいいが、災害が起きたり友人が困難に直面したり時には、その友情を封じておく必要はなく、声を掛け、寄り添って、手を取り、力を貸し、苦しみを分かち合って困難の克服を助けてやることができるのである。その時、あなたが友人にしてやれる最大の手助けは、精神面での慰めと力なのかもしれない。

災難に直面すると、人間性の輝きともろさを特に感じるものである。天災や人災に直面すると、人は恐れを抱きがちだが、困難に打ち勝って情勢を逆転する精神というものもある。それは堅持と知恵であり、それは災難に対応する技であり手法なのだ。力強く、こだわりを持って日々を送ることである。これは、生活を特定の一部分、一枚の映像、一つの記憶にとどめるということではない。生活は私達の記憶によって定まるものではなく、日々新たになるものなのである。「毎日、新しい日が昇るのだ」。

日本で大地震が発生して数ヶ月、友愛についてのニュースをよく見かけるので、私はこうした感想を抱いた。「越えられない火山はなく、渡れない砂の川もない。」きっと、精神さえ崩れなければ、日本人はいつか地震の影を抜け出せるはずであると、私は考える。